

【研究発表1】 第2席

「吉田流鍼灸書からみた日本鍼灸再興期」

京都 長野仁

中国医学が飛鳥期に伝来して以来、鍼灸は医癌の一方を担っており、平安の永觀二年(984)に鍼博士・丹波康頼が撰じた『医心方』巻第二の鍼灸篇は、その到達点を示す。しかし、室町初期の權大外記・中原康富(1400~1457)の『康富記』嘉吉二年(1442)十月十七日条には、「本道之醫師之中當時無錢之名譽、可云道之零落歟。」とあり、当時、鍼灸が低迷していたことが窺われる。

室町末期、曲直瀬道三が李朱医学を唱導したのと前後して、鍼灸を専門とする諸派が現われた。朝鮮の帰化人・吳林達に学んだ入江頼明を発端とする入江流、永錄元年(1558)に入明し、杏琢周に三年間師事した出雲大社の神官・吉田意休を始祖とする吉田流がその代表である。また吉田流と関係する流派として匹地流がある。開祖・匹地喜庵は、慶長年間(1596~1614)に長崎にて鍼術を専らとした明人・琢周からその伝を受けている。

入江流は、山瀬琢一を経て杉山流へと展開していくが、鍼灸書の伝存は確認できず、その実態は不明な点が多い。しかし吉田流には、流儀を伝える鍼灸書が幾つか現存する。それらは大きく三系統に分類できる。『経絡考義』系、『刺鍼家鑑集』系、『虫書』系である。さらに匹地流鍼灸書『大明琢周鍼法一軸』『大明琢周鍼法抄』『鍼法秘粹』の諸本も今に伝わり、扁鵲新流(詳細未詳)の鍼灸書も匹地流と若干の関係を持つ。

よって今回の研究では、吉田流鍼灸書を詳細に検討し、匹地流鍼灸書等も参考に加えながら、室町末期における日本鍼灸再興期の実像に迫りたい。